

【一】<sup>0</sup>一<sup>1</sup>丁<sup>2</sup>下<sup>2</sup>三<sup>2</sup>

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
一 教1常①	イチ イツ ひと ひとつ	一 一 一	一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一
			一						
七 教1常①	シチ なな ななつ なの	十 十 十	七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七
			七	七 七					七
丁 教3常①	チョウ テイ	口 ● 卩	丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁
		●							
下 教1常①	カ・グ おきる・おろ す・くださる・ くだす・きか る・きけるし た・しも・も と	下 下 下	下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下
			下						
			下						
三 教1常①	サン みみつ みつつ	三 三 三	三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三
			三	三					
上 教1常①	ショウ・ジョウ あがる・あげ る・うえ・う わ・かみ・の ぼす・のぼる	上 上 上	上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上
			上						
			上						

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
一	一	一	一	一			一	一	一	一		一
		一										現代中国
		一										
七	七	七	七	七			七	七	七	七		七
		七										現代中国
		七										
丁	丁	丁	丁	丁			丁	丁	丁	丁		丁
		丁										現代中国
		丁										
下	下	下	下	下			下	下	下	下		下
		下										現代中国
		下										
三	三	三	三	三			三	三	三	三		三
		三										現代中国
		三										
上	上	上	上	上			上	上	上	上		上
		上										現代中国
		上										

【七】「十」と字体衝突した結果、縦線を曲げるようになる。  
当用漢字字体表では康熙字典や当用漢字表と同じように最終  
画を上にはねているが、教育漢字は止めている。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

【一】<sup>2</sup>丈<sup>2</sup>与<sup>3</sup>丑<sup>3</sup>不<sup>4</sup>且

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
丈	ショウ たけ								
丈	③								
万	マン ばん よろず								
萬	マン ばん よろず								
与	ヨ あたえる あずかる くみする								
與	あたえる あずかる くみする								
丑	チュウ うし								
不	フブズ								
且	カツ しばらく まさに								

【丈】「支」と字体衝突し、漢代に字体を変更する。「丈」の点は「咎なし点」で付けても付けなくても良い。

【万】「万」と「萬」は別字だが古くから通用し、干祿字書も両方とも「正」とする。「萬」の居延漢簡の草書体が「万」に変化したとする説もあるが、「万」は居延漢簡の時代より

も前の戦国時代から使われており時代が合わない。もう一つ関連する文字に「卮」がある。この字も「マン」と読む。「マン字」が「マンジ」になったようだ。

【与】「與」とは別字だが通用する。多くの漢和字典では「一」の2画だが、康熙字典では「一」の3画で、字体も異なる。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

最終画の横線が右に突き出るのは江戸以降か。拓本の干祿字書は不鮮明なので江戸期の版本をあげる。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。



【1】中<sup>3</sup>串<sup>6</sup>【、】丸<sup>3</sup>丹<sup>3</sup>主<sup>4</sup>井【ノ】乃<sup>1</sup>久<sup>2</sup>

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文篆文 篆書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
中	チュウ ジュウ なか あた うち	中	中	中	中	中	中	中
教1常①		中	中	中	中	中	中	中
		中	中	中	中	中	中	中
		中	中	中	中	中	中	中
串	カン セン くし なれる つらぬく							
新①								
丸	ガン まる まるい まるめる							
教2常①								
丹	タン							
常①								
主	シュ ス おも ぬし							
教3常①								
井	タン トン どんぶり どん							
新②								
乃	ノ ダイ ナイ すなわ ちの							
人①								
久	キュウ ク ひさしい							
教5常①								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
中	中	中	中	中			中	中	中	中	中	中
屏風土台	節用	13										現代中国
		串										
		串										
		串										
串	串	串	串				串					串
元暦萬葉⑥	節用	16										現代中国
丸	丸	丸	丸	丸	丸		丸	丸	丸	丸	丸	丸
元暦萬葉⑫	節用	2			教科書						康熙・俗字	現代中国
丹	丹	丹	丹				丹	丹	丹	丹		丹
元暦萬葉①	節用	3										参考 現代中国
主		主	主	主			主	主	主	主		主
屏風土台		4										参考 現代中国
	井	井	井				井		井			井
	節用	4										現代中国
乃	乃	乃	乃				乃					乃
元暦萬葉①	節用	1										現代中国
		乃										
久	久	久	久	久			久	久	久	久	久	久
元暦萬葉②	節用	2										現代中国

【丸】点の位置に注意。『康熙字典』では「凡」に似た字を正字とし、通用字体を俗字としている。漱石は江戸版本と同じ字体を書いている。直井潔「国定教科書に於ける正字俗字一覽表」では「文部省に於いて特に正体を捨てて俗體を取りれたるもの」としている。

【丹】太字は「丹」よりも「丹」に近い。説文篆文に従えば点には横線になるはず。  
【井】「どんぶり」という意味で使うのは日本独自。中国では「井」と「井」は異体字でどちらも「井戸」のこと。上の表の中国での使用例は「井」の意味。「刑」の初文が「井」な

ので、それを区別するために「井戸の「井」」に点を加えたとか。「どんぶり」とは物が水に落ちる音という説もあり。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文篆文 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
之	シの これ ゆく 人①								
乎	コ 人①								
乍	ながら ①								
乏	ボウ とほしい 常①								
乗	ジョウ のせる のる 教3常①								
乗	人②								
乙	オツ おつによ きのと 常①								

【之】説文の字体に対応する明朝体の字体が康熙字典では古文になっている。隸書以降の字体は里耶秦簡の字体を元にしたものか。

【乗】唐代の正字である開成石経(楷書)と清代の正字である康熙字典(明朝体)の字体が異なる。正字体の根拠である説

文篆文と較べればどちらもおかしい。夏目漱石は伝統的な楷書/行書の字体を書いているが、太宰治は康熙字典/文部省活字の字体の影響を受けているようだ。

【乙】乙のようになつたりLのようになつたりする。開成石経(唐代の正字)では転折の後、あまり左に戻らず、「風」の

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
之	之	之	之	之			之					之
		出										
乎	乎	乎	乎	乎			乎					乎
												乎
乍	乍	乍	乍				乍					乍
乏	乏	乏	乏	乏			乏	乏	乏	乏		乏
乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗	乗
乙	乙	乙	乙	乙	乙		乙	乙	乙	乙		乙

2画目のような形。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
九	ク キウ このつ								聖武天皇雜集
乞	キツ こい ごう								聖武天皇雜集
也	ヤ なり や								王勃詩序
乱	ラン みだす みだれる おさめる								王勃詩序
亂	ラン おさめる みだす みだれる わたる								光明皇后教諭
乳	ニウ ちち								王勃詩序
乾	カン かわかす かわくいぬい								王勃詩序
了	リョウ おえる おわる ざとる								珣玉集
予	ヨ あづかる あづける あたえる あらかじめ われ								伝空海急就草

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
九	九	九	九	九			九	九		九	九	九 現代中国
乞	乞	乞	乞				乞					乞 干祿<俗> 現代中国
也	也	也	也	也			也					也 現代中国
乱	乱	乱	乱	乱	乱	乱	亂	乱	乱	乱	乱	乱 江戸干祿<俗> 現代中国
亂		亂	亂									亂 干祿<俗>
乳	乳	乳	乳	乳	乳		乳	乳	乳	乳	乳	乳 現代中国
乾	乾	乾	乾	乾	乾		乾	乾	乾	乾	乾	乾 干祿<俗> 現代中国
了	了	了	了	了	了		了	了	了			了 現代中国
予	予	予	予	予	予		予	予	予	予	予	予 現代中国

【也】説文に2種があり、康熙字典では片方が古文。ならば睡虎地秦簡の字体も古文ということになる。

【亂(乱)】「乱」は干祿字書と康熙字典に「亂」の俗字として掲載。私見では「乱」は「亂」の略字で、「亂」の「ム」の部分「乱」の口だと思う。日本では上代以降「亂」と「乱」の

両方が使われるが、江戸時代になると「乱」が多く使われ、繁体の「亂」の使用例がみつからない。文部省活字は「亂」。文部省活字の影響を受けていると思われる太宰治も「乱」を書き、「亂」は書いていない。

【予】別字だが「豫」と通じる。太宰治は「豫感」と書いてい

る。九経字様の字体は楷書とは思えないが、これが正字。開成石経の「豫」は最後の2画を省いている。これは唐の代宗の諱を避諱して欠画しているのだから。現代中国では「予」と「豫」を統合していない。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
豫	ヨ あらかじめ		豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫
争	ソウ あらしう いかでか		争	争	争	争	争	争	争
争	ソウ あらしう いかでか			争	争			争	争
事	シズ こと つかえる		事	事	事	事	事	事	事
二	ニ ふた ふたつ		二	二	二	二	二	二	二
于	ウ あ おいて ここに に・より		于	于	于	于	于	于	于
井	ショウ セイ い		井	井	井	井	井	井	井
云	ウン いう		云	云	云	云	云	云	云
雲	ウン くも		雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲

【争】「争」が正字体とされているが、行書や楷書では「争」「争」両方が書かれている。横線が右に出るものと出ないものがある。漱石も太宰も横線を右に出していない。睡虎地秦簡の上部も「日」のようだが、傾いているから「爪」なのだろう。漢代には上部を完全に「日」に作る字体がある。書譜

の字体も「日」をくずしているように見える。【争・事】「争」と「事」の差は「口」が点々に略されるだけで大きな問題ではない。下から2本目の横線が漢代までは右に出ているが、南北朝以降は出なくなる。九経字様、康熙字典など正字では出る。弘道軒も漱石も太宰も出していない。漱石

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
豫	豫	豫	豫		豫		豫		豫			豫
争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争
争			争									
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
于	于	于	于				于					于
井	井	井	井	井			井	井	井	井	井	井
云	云	云	云	云			云					云
雲	雲	雲	雲	雲			雲	雲	雲	雲	雲	雲

はほとんど草書を書くが、まれに楷書・行書の字体を書く。【于】説文篆文と泰山刻石の字体が異なるが、もちろん泰山刻石が正しいのだろう。【井】説文篆文には点があるが、なぜか開成石経にはない。「刑」の初文が「井」なので字体の衝突を避けるために「井

戸」の「井」の方に点をつけて「井」にしたともいう。【云】「雲」の元の字で、後に「雨」を加えたという。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
亡	ボウ モウ なくなる にける 教6常①								王勃詩序
	ほろびる ほろぶ								王勃詩序
亥	ガイ 人①								瑠玉集
交	コウ かう かわす まざる まじえる 教2常①								王勃詩序
	まじる まじわる まぜる ごも								王勃詩序
亦	エキ また 人①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
亨	キョウ コウ とおる 人①								王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												亡 現代中国
												亥 現代中国
												交 現代中国
												亦 現代中国
												亨 現代中国

【交】「一」の下に「久」を書く字体あり。江戸では「一」の下に「火」を書く字体あり。漱石は複数の字体を書く。  
 【亦】魏霊蔵造像記と聖武天皇雜集(下)は「一」を「ク」の形に書くが、これは虚画の左払いを実画として書いたものか。康熙字典の古文の字体は古代の例に見えない。

【亨】「亨」と「亨」を古代から別字としている字典と、元は同字で後に使い分けが生じたとする字書がある。『康熙字典』、『角川書道字典』、『新書源』(二玄社)は前者であり、その他多くの字典や漢和辞典は後者。本書では前者の説を採ったが確証はない。字の上部は古代はやくら(梯子)なのだが、説

文篆文で突然「口」になる。これは「高・高」と同様だ。南北朝以降は梯子に戻り、開成石経でさえ梯子だ。その字体が日本に伝わる。江戸になるとまた「口」に戻る。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
享	キョウ うける 常①								藤原朝隆 宝珠取 +6
									藤原朝隆 宝珠取 +6
									藤原朝隆 宝珠取 +6
京	キョウ ケイ みやこ 教2常①								居延漢簡
京	キョウ みやこ ②								居延漢簡 張遷碑 十七帖 興福寺斷碑 張猛龍碑 九成宮 江戸干祿 王勃詩序
									居延漢簡 張遷碑 十七帖 興福寺斷碑 張猛龍碑 九成宮 江戸干祿 王勃詩序
									居延漢簡 張遷碑 十七帖 興福寺斷碑 張猛龍碑 九成宮 江戸干祿 王勃詩序
亭	テイ あずまや とどまる 常①								睡虎地秦簡 説文篆文 馬王堆 曹全碑 智永千字文 蘭亭序 元帥墓誌 皇甫誕碑 開成石經 王勃詩序
									睡虎地秦簡 説文篆文 馬王堆 曹全碑 智永千字文 蘭亭序 元帥墓誌 皇甫誕碑 開成石經 王勃詩序
									睡虎地秦簡 説文篆文 馬王堆 曹全碑 智永千字文 蘭亭序 元帥墓誌 皇甫誕碑 開成石經 王勃詩序
									睡虎地秦簡 説文篆文 馬王堆 曹全碑 智永千字文 蘭亭序 元帥墓誌 皇甫誕碑 開成石經 王勃詩序
亮	リョウ 人①								甘谷漢簡 禮器碑陰 祝允明 牛闕造像記 皇甫誕碑 楊貴氏墓誌
人	ジン ニン ひと 教1常①								居延漢簡 乙瑛碑 十七帖 集字聖教序 孫秋生造像 孔子廟堂碑 江戸干祿 王勃詩序
介	カイ おおきい すけ たすける はさむ 常①								長沙子弼鼎 説文篆文 居延漢簡 小子殘碑 甬比下墓文 九成宮 干祿字書 王勃詩序
									長沙子弼鼎 説文篆文 居延漢簡 小子殘碑 甬比下墓文 九成宮 干祿字書 王勃詩序
									長沙子弼鼎 説文篆文 居延漢簡 小子殘碑 甬比下墓文 九成宮 干祿字書 王勃詩序
									長沙子弼鼎 説文篆文 居延漢簡 小子殘碑 甬比下墓文 九成宮 干祿字書 王勃詩序

【享】「亭」と「亨」を古代から別字としていた本と、元は同字で後に使い分けが生じたとする本がある。『康熙字典』、『角川書道字典』、『新書源』(二玄社)は前者であり、その他多くの字典や漢和辞典は後者。本書では前者の説を採用したが確証はない。字の上部は古代はやくら(梯子)なのだが、説文篆

楷(梯子)が説文篆文では四角になる。説文篆文と正字(開成石経と康熙字典)の字体が一致しない。開成石経はやくら(梯子)を書いているが、康熙字典では四角である。【京・京】前漢以降、「口」を書かずに「日」を書く。江戸干祿は「京」を〈通〉とし、九経字様は〈訛〉とする。江戸以

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												享 現代中国
京	京	京	京	京	京		京	京	京	京	京	京 現代中国
精業本朗詠	開化往来	+6			明治の漢字							江戸干祿(通)
												九経(訛)
亭	亭	亭	亭	亭	亭		亭	亭				亭 現代中国
三体白詩	書礼節用	+7			明治の漢字							
亮	亮	亮	亮				亮					亮 現代中国
四戸本朗詠	節用	+7										
人	人	人	人	人	人		人	人	人	人	人	人 現代中国
元暦萬葉①	節用	人0										
介	介	介	介	介	介		介	介	介	介		介 現代中国
元暦萬葉①	礼容筆粹	人2			国定教科書							

降、「口」を書くのは『干祿字書』や『康熙字典』の出版による影響か。康熙字典では「京」は「原」の俗字。【亭】漱石は「口」、「はしご」、「草書」の3体を書いている。【亭】正字の開成石経も楷(梯子)。漱石は3つの字体を使用。【亮】甘谷漢簡、楊貴氏墓誌、文部省活字の足が「几」の形。

五車韻府、美華書館、築地二号の活字もこの字体。【介】「分」と似た字体になるため、書き順と字体を変えたのか。江戸では節用の字体が一般的。弘道軒はそれを採用。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
仇	キウ あだ かたぎ		仇	仇 仇			仇	仇 仇	仇 仇
①			説文篆文	馬王堆 西狭頌			楊大眼造像	開成石経	聖武天皇雜集
今	コン キン いま	今 今 今	今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今
数2常①		甲骨 大孟鼎 毛公鼎	説文篆文	居延漢簡 西嶽華山廟碑	十七帖	蘭亭序	張猛龍碑 九成宮	五經文字	王勃詩序
仕	ジュウ		仕	仕 仕			仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕
①			説文篆文	居延漢簡 袁景造土牛碑			元暉墓誌 道因法師碑	開成石経	王勃詩序
仁	ジン ニ	仁 仁	仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁
数6常①		甲骨	説文篆文	居延漢簡 曹全碑	十七帖	集字聖教序	張猛龍碑 孔子廟堂碑	開成石経	王勃詩序
仏	ブツ ほとけ		佛				佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛
数5常①			説文篆文			集字聖教序	牛闕造像記 雁塔聖教序	開成石経	聖武天皇雜集
佛	人②						仏 仏		仏
							比丘尼道慧 御注金剛經		聖武天皇雜集
以	イ おも もちいる	以 以 以	以	以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 以 以
数4常①		甲骨 散氏盤 睡虎地秦簡	説文	馬王堆 乙瑛碑	十七帖	集字聖教序	鄭義下碑 孔子廟堂碑	干祿・序	王勃詩序
目	イ	目 目 目		目 目 目			目		
④		甲骨 毛公鼎 包山楚簡		敦煌漢簡 北海相景君碑			馬季華墓誌		
已	イ すでに のみ はなはだ やむ		巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳
②			石鼓文	居延漢簡 乙瑛碑	書譜	王獻之	高貞碑 孔子廟堂碑	開成石経	龔賢指歸
仕	シ ジ つかえる		仕	仕 仕			仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕
数3常①			金文 説文篆文	孔宙碑			龔龍顔碑 温彦博碑	江戸干祿・序	王勃詩序
									仕
									杜家立成
仔	シ	仔 仔 仔	仔						
人①		甲骨 金文 金文	説文篆文						
仙	セン セント		仙		仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙
常①			説文篆文		智永千字文 集字聖教序	論經書詩	孟法師碑	五經文字	聖武天皇雜集
僊	セン		僊	僊 僊			僊 僊	僊 僊	僊 僊
②			説文篆文	尹宙碑 西嶽華山廟碑			陽鳳墓誌	五經文字	聖武天皇雜集

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
	仇	仇 仇	仇				仇					仇 現代中国
	今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今		今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 今 今	今 江戸伊賀越前 現代中国
	仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕				仕					仕 現代中国
	仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁			仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 仁 仁	仁 現代中国
	佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 佛 佛	佛 現代中国
	仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 仏 仏	仏 現代中国
	以	以 以 以	以 以 以	以 以 以			以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 以 以	以 現代中国
	目	目 目 目					目					目 現代中国
	已	巳 巳 巳	巳 巳 巳	巳 巳 巳			巳					巳 現代中国
	仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 仕 仕	仕 現代中国
	仔	仔 仔 仔	仔 仔 仔	仔 仔 仔			仔					仔 現代中国
	仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 仙 仙	仙 現代中国
	僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 僊	僊 現代中国

【今】将棋駒の「歩」の裏側は「金(キン・コン)」と音が同じ「今(キン・コン)」の草書を宛てたものだという。(増川2000)  
【仏・佛】「仏」は遅くとも南北朝の頃には使われていた。日本では「仏・佛」両方が使われてきた。康熙字典では「仏」は「佛」の古文となっているが、実資料は見えない。

【以】「以」と「目」は異体字。「目」は丸い刃がある鋤のような農機具だという。「以」は、これまで「目」に「人」を加えた字だとされていたが、睡虎地秦簡や馬王堆の字形を見ると、「人」とされていた部分は鋤の把手に思える。「巳」は鋤の刃を上に向けた字体だろう。それで「やむ」という意味を

持ったのだろう。唐代までは「巳」と字体が衝突していた。  
【仕】旁は「土」と「土」の2種類がある。隸書は「土」が多数。北魏の楷書は「土」が多数。唐代楷書は「土」が多数。日本では江戸時代まで「土」が多数。正字は「土」。弘道軒は「土」のみ。漱石は「土」と「土」の両方を使用。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
休	キュウ やすまる やすむ やすめる いこう やめる								王勃詩序
									王勃詩序
									王勃詩序
仰	ギョウ コウ あおく おおせ 常①								王勃詩序
									王勃詩序
件	ケン くだり くだん 教5常①								東大寺獻物帖
伍	ゴ 人①								九經・序
仲	チュウ なか 教4常①								王勃詩序
伝	デン つたう つたえる つたわる 教4常①								王勃詩序
傳	人②								
任	ニン まかす まかせ たえる 教5常①								王勃詩序
									小野毛人墓誌

【休】南北朝時代は下に横線やれっかがつく。王羲之も興福寺断碑で横線付きの字体を書いている。唐代の楷書では横線がつくのは度人経1例だけ。日本の上代は横線つきも書かれる。干祿字書では横線付きの字体を「俗」としているが、康熙字典にはない。手書きでは各無し点がつくことが多い。北

魏ではギョニンベンを書くことあり。  
【仰】旁の「印」が「印」と書かれることがある。手書きでは多くの場合「印」の1画目が左から右に書かれる。各無し点がつくことあり。文部省活字の字体は奇異に感じる。  
【伝】この字種は、繁体と略体、正字と通用字、楷書と明朝体

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
保	休	休	休	休			休	休	休	休	休	休
休	休											休
仰	休	休	休	休			仰	仰	仰	仰		仰
件	件	件	件	件			件	件	件	件	件	件
伍		伍	伍	伍			伍					伍
仲	仲	仲	仲	仲			仲	仲	仲	仲	仲	仲
伝	傳	傳	傳	傳	伝		傳	傳	傳	伝	伝	伝
任	任	任	任	任			任	任	任	任	任	任

による字体の違いがよくわかる。現代中国の簡体字は草書の字体。「伝」はなぜこう略すのかわからない。  
【任】中国の古代から日本の江戸時代まで正字も含めて旁は「壬」ではなく「王」とする例が多い。「王」だとしても1画目は左から右に書くことが多い。殷代は「王」でなく「工」。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伐	バツ うつきる ほこる								元暦萬葉⑦ 節用
伏	フク ふせる したかう								元暦萬葉⑦ 節用
位	イ くらい								元暦萬葉⑦ 節用
何	カ なに なん いずれ								元暦萬葉⑦ 節用
伽	カ き とぎ								元暦萬葉⑦ 節用
佐	サ すけ たすける								元暦萬葉⑦ 節用
作	サ サ つくる なす								元暦萬葉⑦ 節用

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
伐	伐	伐	伐				伐	伐		伐		伐 現代中国
伏	伏	伏	伏	伏			伏	伏	伏	伏		伏 現代中国
位	位	位	位	位			位	位	位	位	位	位 現代中国
何	何	何	何	何			何	何	何	何	何	何 現代中国
伽	伽	伽	伽				伽	伽				伽 現代中国
佐	佐	佐	佐	佐			佐	佐		佐	佐	佐 北宋 蔡京 現代中国
作	作	作	作	作			作	作	作	作	作	作 現代中国

【位】金文、古璽の字体は「立」だけでニンベンがない。

【作】甲骨ではニンベンがない。漱石は草書の字体も使う。

【何】甲骨と金文の字体は「何」とは違う系統か。

【佐】説文に解説がない。そのためか干禄字書、五経文字、九経字様、開成石経のいずれにも見えない。「工」が「七」になる異体字は中国の南北朝の頃から。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
佃	デン つくだ 人①							佃	開成石経
低	テイ ひくい ひくまる ひくめる 教4帯①							低	王勃詩序
伯	ハク おき 常①							伯	王勃詩序
伴	ハン バン ともなう とも 常①							伴	聖武天皇雜筆
佑	ユウ たすける 人①							佑	
余	ヨ あます あまる われ 教5帯①							余	王勃詩序
餘	②							餘	開成石経

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
佃	佃	佃	佃									佃 佃 明草韻碑體 現代中国
低	低	低	低	低				低	低	低	低	低 低 草書體 現代中国
伯	伯	伯	伯					伯	伯	伯		伯 現代中国
伴	伴	伴	伴					伴	伴	伴		伴 現代中国
佑	佑	佑	佑					佑				佑 佑 草書體 現代中国
余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余 現代中国
餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘		餘 現代中国

【低】説文の原本にはなかったらしく、徐鉉による説文(大徐本)に新附字として掲載されている。唐代正字もない。旁が「互」の字体もある。隸書に旁が「皇」に似た字体のものがある。現代中国では最終画は横線ではなく点。  
【伯】西周まではニンベンがなく「白」だけ。

【佑】説文篆文ではニンベンがない。平安中期の桂宮本万葉、江戸期の大日本永代節用無尽蔵、ともに旁の「右」は、横線を先に書いている。  
【余】「余」と「餘」は本来は別の字だが、通用する。漱石が両方の字体を書いているのには驚いた。使用例は「持て余し

ている」、「残り気の毒だから」、「汽車が余っ程動き出して」、「学資の餘りを」、「余っ程上等だ」、「余計な手数だ」、「余計な減らず口」、「年中持て余して」、「残り上品ぢやないが」、「餘っ程えらく」、「余っ程辛防強い」、「蚊が餘っ程刺した」、「余計な発議」……さて使い分けの基準はあるのだろうか。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伶	レイ		𠂔				伶		伶 王僧孺書
依	イエ	𠂔 𠂔 𠂔	𠂔	依	依	依	依	依	依 王勃詩序
価	カ あたい		價				價	價	價 聖武天皇雜集
佳	カ よい		佳	佳	佳	佳	佳	佳	佳 王勃詩序
侃	カン つよい		侃	侃			侃	侃	侃 聖武天皇雜集
供	キョウ ク そなえる とも		供	供	供	供	供	供	供 聖武天皇雜集
俠	キョウ きん		俠	俠	俠	俠	俠	俠	俠 王勃詩序
俠			俠						
佼	コウ								

【依】甲骨、金文では人は左ではなく「衣」の中にある。中にいる人は、右向き、左向き、正面の3種類。  
【価】弘道軒に突然略字が出現。これはいつ作られたものか。  
【佳】江戸版本には傍の「圭」の上の「土」を「大」に書くことがある。咎無し点がつくことが多い。

【侃】旁が「品」の字体が干禄書で〈俗〉になっている。草書では「口」が2つ並んだものが点3つになる。「侃」の傍の下部の点3つを「口」2つの草書と間違えて傍が「品」になったのだろう。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
伶	伶	伶	伶									伶 現代中国
依	依	依	依	依				依	依	依		依 五経・序
價	價	價	價	價				價	價	價		价 現代中国
佳	佳	佳	佳					佳	佳	佳		佳 現代中国
侃		侃	侃									侃 現代中国
供	供	供	供	供				供	供	供		供 現代中国
俠	俠	俠	俠	俠				俠	俠			俠 現代中国
佼		佼										佼 現代中国



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
侑	ユウ すすめるた ずける 人②								
來	ライ きたす きたる くる 人②	來 來 來	來	來	來	來	來	來	來
来	教2常①	來	來	來	來	來	來	來	
俄	ガ にわか 人①		俄			俄	俄	俄	俄
係	ケイ かか りかか るかか わる つなぐ 教4常①		係	係	係	係	係	係	係
				係			係		
侯	コウ きみ これ 常①	侯 侯 侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
侯		侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
		侯							
俊	シュン すぐれる 常①		俊	俊	俊	俊	俊	俊	俊
信	シン のばす のびる まかせ るまこ と 教4常①	信 信 信	信	信	信	信	信	信	信
		信	信	信	信	信	信	信	信
侵	シン おかす 常①	侵 侵 侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵
		侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵

【來】「人」は早書きすると「亠」の形になる。漢代から通用体が書かれ、干祿字書の序でも通用体が使われている。漱石はもちろん、太宰も通用体を書いている。  
【係】傍の一面目が略されることあり。節用と弘道軒は傍の一面目を左から右に書いている。

【侯】古代の字は「尸+矢」で「夂」は後に加わる。「夂」の左ハライと「尸」の縦線が合わさってニンベンになる。「侯」が正字体、「侯」の「矢」が「夫」になった字体が通用体。『陸軍幼年学校用字便覧』では「侯」を〈本字〉としている。  
【信】傍の「言」はもともと「辛+口」の形で、「辛」は略さ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
		侑 侑 人6										侑 現代中国
來	來	來 來 人6	來	來	來	來	來	來	來	來	來	徠 來 参考 現代中国
来	来	来 来	来	来	来	来						
俄	俄	俄 俄 人7	俄	俄			俄					俄 現代中国
係	係	係 係 人7	係	係			係	係	係	係	係	系 現代中国
侯	侯	侯 侯 人7	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯 現代中国
侯	侯	侯 侯 古文	侯	侯								
		侯										
俊	俊	俊 俊 人7	俊	俊			俊	俊	俊	俊	俊	俊 現代中国
信	信	信 信 人7	信	信	信	信	信	信	信	信	信	信 学参 現代中国
侵	侵	侵 侵 人7	侵	侵			侵	侵	侵	侵	侵	侵 現代中国
												侵 米苗 王輝

れて「立」になる。すると「倍」と字体が衝突する。それで漢代に字体を変更したのだろう。  
【侵】説文篆文の字体の傍は「帶+又」なのだが正字体楷書でも「巾」を略している。「又」を「丈」に書く例も多い。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
促	ソク うながす せまる 常①		促	促	促	促	促	促	促
俗	ソク ならわし 常①	俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗
		俗					俗	俗	俗
便	ベン ピン たより すなわち 教4常①	便	便	便	便	便	便	便	便
保	ホ ホウ たもつ やすじる 教5常①	保	保	保	保	保	保	保	保
		保	保	保	保		保	保	
		保	保	保					
		保	保	保					
俣	また 人①								俣
侶	リョ ども 人→新①					侶	侶	侶	侶
							侶		
俐	リ かしこい 人②							俐	俐
侮	フ あなどる 人③	侮	侮				侮	侮	侮
侮	常①						侮		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
促	促	促	促	促			促	促		促		促
俗	俗	俗	俗	俗			俗	俗	俗	俗		俗
俗												
便	便	便	便	便			便	便	便	便	便	便
保	保	保	保	保			保	保	保	保	保	保
俣												俣
侶	侶	侶	侶				侶	侶	侶		侶	侶
俐												俐
侮	侮	侮	侮	侮			侮	侮	侮	侮	侮	侮

【俗】「俗」の上部はもと「ハ」が2つ重なったような形。南北朝時代には下の「ハ」がヒトヤネまたは横線のような形になる。唐代の正字は下の「ハ」が左右に離れている。漱石は草書を書いている。

【保】「人」と「子」に関係する字とおもわれる。甲骨文の字

形を明朝体にすれば「仔」となる。金文では「子」のおしりか足のあたりに「ノ」状の曲線がある。これが「子」の左右に配されるようになったのであって、旁は「口+木」ではなく、「子+ハ」。そもそもカタカナ「ホ」の元字だから、教育漢字のように「木」を書くのはおかしい。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
倅	コウ さいわい 人①						倅	倅	倅 聾替指歸
借	シャク かりる かず 教4常①		借	借借			借借借借	借借借借	借借借借借借 元暦萬葉② 節用 人8 元鮮于枢 現代中国
修	シュウ シュ おさまる おさめる 教5常①		修	修修			修修修修	修修修修	修修修修修修 元鮮于枢 現代中国
倉	ソウ くら 教4常①	倉	倉	倉			倉倉倉倉	倉倉倉倉	倉倉倉倉倉倉 元暦萬葉① 告志篇 人8 元鮮于枢 現代中国
値	チ あたひ ね 教6常①		値				値値値値	値値値値	値値値値値値 元暦萬葉⑥ 〇 現代中国
倒	トウ たおす たおれる さかさま 常①		倒	倒倒			倒倒倒倒	倒倒倒倒	倒倒倒倒倒倒 墨流本明詠 節用 人8 現代中国

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
	倅	倅	倅				倅					倅 幸 草書辨体 現代中国
												倅 倅 草書體部韻貫 北宋 米芾
	借	借	借借借借				借借借借借借					借 借 元鮮于枢 現代中国
	借	借										借 元趙孟頫
	修	修	修修修修				修修修修修修					修 現代中国
	修	修										修 現代中国
	倉	倉	倉倉倉倉				倉倉倉倉倉倉					倉 現代中国
	倉	倉										倉 現代中国
	値	値	値値値値				値値値値値値					値 現代中国
	値	値										値 現代中国
	倒	倒	倒倒倒倒				倒倒倒倒倒倒					倒 現代中国

【倅】唐代以前の用例がみつからない。空海が聾替指歸に使っているのが不思議なくらい。\*柳公権は顔真卿とともに正字体を使うことがある。隣の「幸」の下部は横線が増えて「羊」になることがある。  
【修】古體の1例目には「彡」がなく、2例目は「支」ではな

く「又」。いずれもニンベンの右に縦線はない。偏は中国の南北朝期以来、「彡」にすることがあり、我が国でも江戸期まで名残がある。隣の上部は「支」「女」「久」の3種があり、後藤朝太郎「教育上より見たる明治の漢字」では、「久」を標準字、「女」を許容字とする。説文篆文の字形を素直に楷書

や明朝体にすれば「支」になる。現代中国は「久」の字体を書く。隣の下部は3点と2点があり、3点では右上から左下に「彡」のように書く、3点目を左上から右下に書き「久」のように書く、3点とも左から右に「三」のように書く、の3種がある。漢から初唐まで「修」と「脩」は通用していたという。

【値】手書きでは隣の「直」に鉤形を書くことはない。江戸では「値」のかわりに「價(価)」または「直」を使う。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俳	ハイ		俳				俳 能	俳 能	俳 能
倍	バイ そむく ます		倍	倍	倍		倍 倍	倍 倍	倍 倍
倭	ヒョウ たわら								
倣	ホウ ならう								
倂	ホウ					倂 倂			
倫	リン たぐい みち		倫		倫	倫 倫 倫	倫 倫 倫	倫 倫	倫 倫
倭	ワ やまと		倭				倭 倭	倭 倭	倭 倭
偽	ギ いつわる にせ		偽	偽	偽	偽 偽	偽 偽	偽 偽	偽 偽
偽									
偶	グウ たまたま とものがら		偶	偶	偶	偶 偶	偶 偶	偶 偶	偶 偶
倦	ケン うむ		倦	倦	倦	倦 倦	倦 倦	倦 倦	倦 倦

【俳】楷書(唐代の正字正字を含む)では傍の左側の縦線をはらわずに止める。弘道軒や現代中国の明朝体(宋体)も同様。  
 【倍】漢代は傍の横線を長くする場所が一定していない。康熙字典では傍の1画目は横線。現代中国では点。  
 【倭】江戸期よりも古い使用例が見つからない。

【倣】北宋期よりも古い使用例が見つからない。現代中国では「仿」を使う。日本では江戸期よりも古い使用例が見つからない。漱石は草書も使っている。  
 【倫】傍の縦線が上に出る、出ないの2種の字体がある。説文篆文に倣えば上に出るはずだが、開成石経の字体は出ない。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
	俳	俳	俳	俳			俳 俳	俳 俳	俳 俳	俳 俳		俳 現代中国
	倍	倍	倍	倍			倍 倍	倍 倍	倍 倍	倍 倍		倍 現代中国
	倭	倭	倭	倭			倭 倭	倭 倭	倭 倭	倭 倭		倭 現代中国
	倣	倣	倣	倣			倣 倣	倣 倣	倣 倣	倣 倣		倣 現代中国
	倂	倂	倂	倂			倂 倂	倂 倂	倂 倂	倂 倂		倂 現代中国
	倫	倫	倫	倫			倫 倫	倫 倫	倫 倫	倫 倫		倫 現代中国
	倭	倭	倭	倭			倭 倭	倭 倭	倭 倭	倭 倭		倭 現代中国
	偽	偽	偽	偽	偽	偽	偽 偽	偽 偽	偽 偽	偽 偽		偽 現代中国
	偶	偶	偶	偶	偶	偶	偶 偶	偶 偶	偶 偶	偶 偶		偶 現代中国
	倦	倦	倦	倦	倦	倦	倦 倦	倦 倦	倦 倦	倦 倦		倦 現代中国

【偽】漢代の隸書ですでに簡略化されている。弘道軒が正字なのは意外。漢字整理案で傍の4点が線に略されている。現代中国は草書の字体。  
 【偶】最終の2画に注目。通用体も正字体も楷書では傍を8画で書いているが、康熙字典では9画。説文篆文の字体に倣え

ば8画になるはずだが、1画増やすのが明朝体の様式なのだろう。ところが楷書の弘道軒や文部省活字も康熙字典に倣って9画にしている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
健	ケン すこやか たけし		健	健			健 健	健 健	王勃詩序
偲	シ しのび しのぶ		偲				偲	偲	五経文字
側	ソク かたわら がわ	𠂔	側	側	側	側	側 側 側 側	側 側	杜家立成
停	テイ とどめる やめる		停		停	停	停 停	停 停	王勃詩序
偵	テイ うかがう		偵				偵	偵	説文新附
偏	ヘン かたよる ひとえに		偏	偏	偏	偏	偏 偏 偏	偏 偏	法華義疏
偉	イ えらい		偉	偉	偉	偉	偉 偉	偉 偉	王勃詩序
僅	キン わずか わずかに		僅			僅	僅 僅	僅 僅	杜家立成
傘	サン かさ								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
健	健	健	健				健	健	健	健	健	健
偲	偲	偲										偲
側	側	側	側	側			側	側	側	側	側	側
停	停	停	停	停	停	停	停	停	停	停	停	停
				停	停							
偵		偵	偵	偵			偵	偵				偵
偏	偏	偏	偏				偏	偏		偏		偏
				偏								
偉	偉	偉	偉				偉	偉	偉	偉		偉
僅	僅	僅	僅	僅	僅	僅	僅				僅	僅
	傘	傘		傘	傘	傘	傘		傘		傘	傘
					傘	傘						

【健】江戸時代は「𠂔」を「𠂔」の形で書くことが多い。なり、漱石が書いた字体と同じ。  
 【偉】現代中国は草書の字体。  
 【傘】『謹身往来』の字体は康熙字典よりも1画多い。漱石が書いている字体は『謹身往来』の字体の省略体か。「漢字整理案」で字典體として掲載されている字体が、康熙字典とは異

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
備	ヒ そなえる そなわる つぶさに 教5常①								杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
傍	ボウ かたらわ つくり 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傾	ケイ かたむくか たむける 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傑	ケツ すぐれる 常①								王勃詩序
									王勃詩序
債	サイ 常①								杜家立成
催	サイ ちよおす うながす 常①								王勃詩序
									孫過庭

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
備	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備
	備				備							備
	備				備							備
	備				備							備
傍	傍	傍	傍	傍			傍	傍	傍	傍	傍	傍
	傍											傍
	傍											傍
	傍											傍
傾	傾	傾	傾	傾			傾	傾	傾	傾	傾	傾
	傾											傾
	傾											傾
	傾											傾
傑	傑	傑	傑	傑			傑	傑	傑	傑	傑	杰
	傑											杰
	傑											杰
	傑											杰
債	債	債	債				債	債		債		債
	債											債
	債											債
	債											債
催	催	催	催	催			催	催	催	催	催	催
	催											催
	催											催
	催											催

【備】旁を「攴+用」を書く異体字があるが、「明治の漢字」に「攴+田」を書く例がある。現代中国では「イ」を省略して「攴+田」の字体を使っている。  
 【傍】干禄字書では「旁」と「傍」を〈通〉としている。五経文字では序文に「傍」を使っている。漱石は不思議な字体を



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
僕	ボク しもべ								王勃詩序
									王勃詩序
									王勃詩序
僚	リョウ つかさとも								王勃詩序
									王勃詩序
偽	ギ いつわるにせ								豊替指歸
									豊替指歸
僮	ソウ								法華義疏
									法華義疏
億	オウ								聖武天皇集
									聖武天皇集
儀	ギ のり								王勃詩序
									王勃詩序

【僕】旁を「業」とする字体が多く書かれてきた。これを干禄字書では〈俗〉とし、「僕」を〈正〉とする。五経文字では「僕」を隸省とし、説文に従う字体を別に挙げています。

【億】西周の金文にはニソベンがない。九経字様では説文篆文に倣った字体を挙げ、「億」の字体を隸省としている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
僚	僚	僚	僚	僚			僚		僚			僚 仆 干禄<俗> 現代中国
僮		僮		僮								
僚	僚	僚	僚				僚 僚		僚			僚 僚 北魏 寇謙之 現代中国
偽	偽	偽	偽	偽	偽	偽	偽 偽 偽	偽 偽	偽	偽		偽 現代中国
僮	僮											
僧	僧	僧	僧	僧	僧		僧 僧	僧 僧	僧 僧			僧 現代中国
億		億	億				億 億		億 億			億 現代中国
儀	儀	儀	儀	儀			儀 儀	儀 儀	儀 儀			儀 現代中国



【儿】<sup>2</sup>元<sup>3</sup>兒<sup>4</sup>兇<sup>4</sup>光<sup>4</sup>充

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
元	ゲン もと こうべ はじめ								王勃詩序
兒	ケイ キョウ あに								王勃詩序
兇	キョウ おそれる								王勃詩序
光	コウ ひかり ひかる								王勃詩序
充	ジュウ あてる みたく みる								王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元	元	元	元	元			元	元	元	元	元	元
元曆萬葉①	節用	凡2										現代中国
兒	兒	兒	兒	兒			兒	兒	兒	兒	兒	兒
元曆萬葉①	女大学	凡3										現代中国
兇	兇	兇	兇	兇			兇				兇	兇
三本記 寛政和歌	節用	凡4									江戸千祿(通)	現代中国
光	光	光	光	光			光	光	光	光	光	光
元曆萬葉①	節用	凡4									千祿(通)	
充	充	充	充	充			充	充	充	充		充
関戸本朗詠	節用	凡4										現代中国

【兇】古代の字体が多様。人の手のギザギザは何だろ。金文に櫛のようなものを加えた字がある。金文と侯馬盟書に「女」のような形のものがある。楚帛の字体は異彩を放っている。  
【兇】千祿字書では「兇」を〈通〉とし「兇」を〈正〉として

いる。現代中国でも「兇」を用いる。  
【光】唐代の正字と清代の正字(康熙字典)の字体が異なる。  
【充】咎なし点がつくことがある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
先	セン さき まず								光明皇后 薬師論
兆	チョウ さし さぎす								王勃詩序
克	コク か よい								聶晉指歸

【克】説文篆文の字体を楷書や明朝体にしても「克」にはならない。説文解字には古文が2例載っている。康熙字典には古文が5例載っている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
先	先	先	先	先			先	先	先	先	先	先
粘葉本朗詠	節用	凡4										現代中国
兆	兆	兆	兆	兆			兆	兆	兆	兆	兆	兆
尊門親王	節用	凡4										千祿〈通〉 現代中国
克	克	克	克	克			克	克	克	克	克	克
粘葉本朗詠	節用	凡5										現代中国
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
兒	シニ 教4常①								籟指歸
兒	ゲイ シニ 人②								籟指歸
兔	トウ うさぎ 人①								籟指歸
兔									
免	メン まぬかれる 炒るす 常①								杜家立成
免									
党	トウ なかま 教6常①								籟指歸
黨	②								
兜	トウ かぶと 人①								聖武天皇雜集
兜									

【兒】上部の「白」を早書きしてくずすと「旧」になる。「兒」は「儿」部の6画。

【兔】甲骨文にはたくさんの例があるが、6種類だけ紹介。金文の例がみえない。「兔兔兔兔兔兔兔兔」などたくさんの異体字があるが、もっとも多く書かれてきたのは「兔」。五

経文字では「免」の最終画が点ではなく横線。康熙字典では「兔」を本字とし、「兎(兎ではない)」を俗字とする。「兔」は中国では明代に書かれはじめたようだ。江戸時代は「兔」の使用例が多い。弘道軒が見慣れない字体を採用しているが漱石の字体も同じ。明治時代には普通に書かれていた字体なの

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
兒	兒	兒	兒		兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒
兒	兒	兒	兒		兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒	兒
兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔
兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔	兔
免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免
免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免	免
党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党
黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨	黨
兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜
兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜

かもしれない。驚いたことに文部省活字も同じ字体。  
【免】説文には見えない。南北朝期に「勉」のような字体がある。干祿字書では「兔」から点をとった字体を「正」とし、草冠のついた字体を「通」としている。開成石経では「免」ではなく「免」から点をとった字体で現代中国もこの字体を

採用。康熙字典では「免」。文部省活字は「免」。  
【党】「党」と「黨」は本来は別の字。  
【兜】上部の「白」を、2分割した「白(E+ヨ)」で挟む異体字が漢代からある。楷書の「房山雲居寺石経」は「白」の下に「白」を書く動用字。「白」を「北」で挟む字体もある。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
入	ニウ いる いれる はいる								
全	ゼン すべて まったく まったくし まっとうする								
八	ハチ やっ やっ やっ よう								
公	コウ おおやけ きみ								

【入】古代には「大」のような字体もあった。居延漢簡では「人」とかわらない書き方がある。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元暦萬葉①	節用	入0										入 現代中国
全												
粘葉本朗詠	農家調宝記	入4			国定教科書					×		干祿(通) 現代中国
八												
元暦萬葉②	江戸方角	八0										八 現代中国
公												
粘葉本朗詠	節用	八2										公 現代中国